

プロローグ

関東平野には利根川が流れ、大雨が降ると洪水によって人々を悩ませた。京都から東海道を下って足柄山を越えると、その東は「坂東」といい、いたずら小僧のような悪さをする利根川は、「坂東太郎」の名で嫌われていた。

荒野を馬で駆け巡り、戦えば誰にも負けない強さをもつ「坂東武者」は、京都人からは「東夷（あずまえびす）（東の野蛮人の意）」と恐がられ、やがて建久三年（1192）鎌倉に幕府が開かれ、武士の活躍する中世がはじまる。

室町時代には、「江戸」は関東管領、上杉定正の支配するところとなり、その重臣、太田道灌は、鎌倉幕府の武将、江戸重長が建てた「江戸館」のあとに康正三年（1457）「江戸城」を築いた。

しかし江戸のまちづくりは、天正十八年（1590）江戸城に入城した徳川家康の「関東御入国」に始まるというよい。家康は遠大な建設計画をたて、まちづくりをはじめた。

文禄三年（1594）隅田川の上流、荒川には千住大橋を架ける。慶長三年（1598）豊臣秀吉が伏見城で亡くなり、慶長五年（1600）家康は天下分け目の合戦、関が原の役で勝利、慶長八年（1603）征夷大將軍となり、全国の大名を従え、江戸に幕府を開くことを決断した。日本は古代から政治、経済、文化の中心を西に置いていたので、東の「江戸開府」は冒険であったに違いない。数々の特色をもった質の高い生活・文化を発展させた江戸時代は、明治の改革に向かう。そしていまの首都、東京へと続く。



江戸から 東京へ

江戸の原風景は・・・

「江」は海水が陸地に入り込んだ、「戸」は入口で、「江戸」は、墨田川が海に流れ込む低湿地から付けられたものとされている。

その西側には武蔵野台地が広がっていて、葎や萩の生い茂る原野だ

った。この光景は古歌に詠まれ、

武蔵野は 月の入るべき山もなし
草より出でて 草にこそ入れと。

武蔵野台地は、東から西へ、五つの小台地、上野、本郷、麴町、麻布、品川台地から成立し、それらの間には谷や沼、また川があつて、いくつもの入江をつくっていた。日比谷入江はもっとも大きく、海は遠浅で波は静かだった。海中の海苔をとるため、竹で編んだ「ヒビ」が使われたので、それが「日比谷」の地名になったといわれている。

入口には大きな中州があり、江戸前島と呼ばれ、その東側を流れる平川の流域には、人々が住みついていた。附近一帯を支配していた坂東武者の棟梁、江戸重長は、麴町台地の東端に「江戸館」をたて、源頼朝のために戦った。



太田道灌の江戸城

十五世紀、室町時代となり江戸は上杉定正の支配するところとなったが、その重臣、太田道灌は、康正三年(1457)、江戸館のあと、日比谷入江を見下ろす高台に江戸城を築いた。堀が掘られ、道灌の館を中心に、多くの倉や厩が並び、櫓と石門をもっていて、名城と言われていた。

そのころの京都は応仁の乱で荒れ果て、道灌を慕って江戸に移って集ってきた。平川の南岸の平川村はまちとして賑わい、河口には大きな「高橋」が架けられて、港が開かれた。

しかしこの繁栄は、文明十八年(1486)、主君の上杉定正によって道灌が暗殺され、突然の死によって、江戸の城下は再び淋しい田舎に逆戻りした。

徳川家康の江戸入り

天正十八年(1590)の旧暦八月一日、徳川家康は江戸城に入り、このときから関東支配がはじまったが、これより先、豊臣秀吉は小田原の北条氏を攻略して、天下統一を果たしていた。その二武将として働いた家康に与えられたのは、北條の領地、関八州、すなわち武蔵(東京・埼玉)、相模(神奈川県)、安房(千葉)、下総(千葉・茨城)、常陸(茨城)、上野(群馬)、下野(栃木)の関東全域だった。引き換えに家康の旧領地の駿河(静岡)、遠江(静岡)、三河(愛知)、甲斐(山梨)、信濃(長野)は取り上げられた。

秀吉によるこの国替えは、徳川家が、京都から遠い、いわば田舎に追いやられる仕打ちと受け取られ、家康の重臣はこぞつて反対したが、自ら進んで秀吉の命に従った。しかもそれまで築城された小田原、鎌倉を越え、もっと東の江戸に目を向けたのは、城下の高橋に良港をもち、広大な武蔵野台地をひかえて、将来の展開を期待したのであると推測されている。



家康の都市計画

家康は、道灌の築いた江戸城の改造を始めたが、平和な時代の政治を目指した。商工業を盛んにして、都市生活を豊かにするため、平安京や、さらにそのモデルにされた中国の都長安に学び、「四神相応(しじんそうおう)の地形」を基本として都市計画を進めた。

東西南北に四神を配し、それぞれの神として、まず青龍が宿る川、朱雀が宿る池、海、白虎が宿る道、玄武が宿る山を置いた地形を基礎にして計画を立てた。

南の日比谷入江に向かって、江戸城の正面(大手)をおき、平川を青龍、江戸湊を朱雀、東海道を白虎、麴町台地から富士山を望んで玄武の神に、それぞれ適うように設計した。いまも使われている、「竜の口」、「虎の門」などの地名はその名残とされている。

土木工事の開始、町割り

江戸の町づくりには、大規模な自然改造を必要とした。家康は城下周辺の地形を調べ、実施計画を練った。江戸町奉行を総監督とし、間もなく土木工事を行う普請奉行、測量を行う地割奉行を任命し、計画に沿って道路や堀の位置を決めてゆく。

建築資材や生活物資を運ぶため、平河河口から江戸城の大手門近くまでの「道三堀」がつくられた。また海岸に近いため、井戸を掘っても飲み水にはならないので、小石川沼から水を引いて水道とした。また赤坂溜池の水も水道として使われた。

一方城下町は、住む人の身分によって三つに分別した。

- ・武士が住む武家地
- ・寺社のある寺社地
- ・町人が住む町人地

三河や遠江など徳川の旧領地から移ってきた家臣は「士



衆住居(武家屋敷)」を構え、大手門の前の平川岸をはじめ、各所に散在させ、城北の北の内から城西の麴町にかけての高台には、代官などの屋敷や番衆(下級武士)の長屋が置かれ、「代官町」「番町」と呼ばれた。

寺社地は、城下町周辺の交通の要所に設け、また神田台に移転させ、町人地は、大手門のある「道三堀」近辺や、古く道灌の時代から賑わっていた高橋を常盤橋と改名して、その東方に配置した。

繁栄の本(もと)となるので、ここを特に「本町」と呼んだ。その町割りは、平安京をモデルとして、一町を四方に区画して町人の住居とした。その中を井の字型に分け、道路に面したところに町屋をたて、中央は「会所地」として裏の空地は、共同の便所やごみ捨て場とした。

道路の幅は、本町通りとそれと交わる通町筋(いまの日本橋通り)をそれまでの城下町より広くして、スケールの大きな町づくりを目指した。

町人地の「道三堀」筋周辺は特に賑わい、両岸には材木町、舟町、四日市町ができ、町作りの中核となった。

全国から材木が集められ、材木商が軒をつらね、海運業を営む「回船問屋」が集まった。四日市町には、周辺の村人が生活物資を運び込み、市場となっていた。川には橋が架けられ、江戸を中心として交通網が整備され、家康が入国してわずか十年で、江戸は大都市に成長する基礎が出来上がった。

参考書：内藤 昌・イラストレーション 穂積和夫

「江戸の町へ上」巨大都市の誕生 草思社(一九八〇)

「江戸から東京へ」は次号につづく。

江戸城 「本丸」 の今



① 北桔橋



② 乾濠



③ 天守閣跡



④ 旧本丸



⑥ 乾濠から蓮池濠へ



⑤ 平川門

「本丸」の北のお濠には「北桔（はね）橋」が架かっている(1)。この橋の左は平川濠、右は乾（いぬい）濠(2)で、「皇居東御苑」の北の入口になっている。

この門をくぐると、かつて目の前には壮麗な天守閣が聳えていた。建物は消失してしまったため、現在は跡地に石垣(3)を残すのみだが。

さらに進むと「旧本丸」(4)となる。いま建物は全く消え、一面の芝生が広がっていて、旧本丸の広場から北を振り向くと、天守閣の石垣が遠く望まれる。

また北桔橋の左は平川濠から大手濠へと続く。平川橋を渡ると豪壮な「平川門」が構え、「皇居東御苑」への重要な入口になっている(5)(東京メトロ「竹橋」下車)。「皇居東御苑」は、月・金を除いて一般に公開。

一方北桔橋の右手の乾濠の南(6)は蓮池濠へと続く。斜め直線的に南東に向かう蓮池濠の西側には、皇居内の紅葉山一帯が望まれる。しかし一般の入場は禁止されている。